

日本記者クラブ会報

<50年特集>



目次

▼ はじめ	理事長 原田亮介	4 6 7	3
▼ 略史1	春原昭彦(初代総務部長)	5	
▼ コラム1	桂敬一(第2代総務部長)	7	
▼ コラム2			
▼ 歴史に残る会見			
▼ コラム3	小島章伸(元副理事長)	9	
▼ 写真でつづる50年		8	
▼ 略史2		7	
▼ 歴代理事長からのメッセージ			
▼ 企画委員 会見の記憶			
橋本五郎(読売新聞社)			
倉重篤郎(毎日新聞社)			
会田弘継(共同通信出身)			
脇祐三(日本経済新聞社)			
宮内正英(スポーツニッポン新聞社)			
川戸恵子(TBSテレビ)			
安井孝之(朝日新聞出身)			
傍示文昭(西日本新聞社)			
粕谷賢之(日本テレビ放送網)			
小島明(日本経済新聞出身)			
岩崎玄道(元専務理事)			
▼ 寄稿1			
28 29	27	26	26
▼ 寄稿2			
▼ 寄稿3			
▼ これまでの主な会見			
▼ わざわざ			
会報委員長 乾正人			





JAPAN NATIONAL PRESS CLUB

創立50周年を迎えて

19代日本記者クラブ理事長
(日本経済新聞社専務執行役員論説委員長)
原田亮介



日本記者クラブは大阪万博の前年の1969年11月1日に産声を上げた。万博で世界中から来日する要人との記者会見を自前の施設や組織で開きたい、という先人の熱意がプレスクラブの実現に結集したのである。

この年、6月には68年の国民所得統計が発表され、国民総生産(GNP)が50兆円台に乗り、ドル換算で初めて西独を抜き、世界第2位になったことが伝えられた。7月には米国のアポロ11号が月面着陸に成功し、アームストロング船長が「一人の人間には小さな一步だが、人類にとって偉大な飛躍である」と述べた。日本国内の衛星中継の視聴率は68%にも達した。

大学紛争で東大入試が中止になり、全米にベトナム戦争への反対運動が広がる騒然とした年でもある。ただ経済成長や科学技術の先行きについて、日本の多くの人がまだ明るい未来を描ける時代だったのではないか。

50年たった今はどうか。経済成長を支えるはずの自由貿易は米中の霸権を巡る対立のなかで存続を脅かされている。デジタル化とグローバル化が貧しかった国々の経済を力エネルギーのように豊かにした半面、先進国は低成長に悩み、民主主義の基盤が揺らいでいる。日本も例外ではない。

先が見えない時代だからこそ、報道の役割と責任は大きい。先人の積み重ねた伝統を大事にしつつ、新しい時代に挑戦することが当クラブの使命だと思い定めている。



クラブ創立前史

日本初のナショナル・プレスクラブ誕生



1959年10月、東京での第12回新聞大会で、本田親男・日本新聞協会会長は「欧米では小さな都市にまでプレスクラブがある。世界に誇る大発行部数を持つ日本の新聞界にはひとつもない」と発言し、「日本にナショナル・プレスクラブを」との提言を行った。

当時の日本でプレスクラブといえれば、敗戦直後の45年10月、米欧の記者が設立した日本外国特派員協会があつた。来日した外国の要人は、日本政府が招待した国賓であつても、外国特派員協会が主催する会見に招かれ、日本人記者は「準会員」として参加を認められるという「占領時代の遺制」が60年代後半まで続いていた。

大阪万博を機に設立具体化へ

これに対し、日本の報道界でも批判の声が高まり、さらに70年の大阪万博を控え、世界各地から多くの要人が来日することになり、報道界だけでなく、外務省はじめ政府筋からも、「日本独自のプレスクラブ創立」

の声が上がりはじめた。

これを受け、新聞協会では69年春ごろから、編集委員会で日本独自のプレスクラブ設立の検討を開始した。日本新聞協会編集委員会の原四郎氏（読売新聞社）は、「同じ時期に、

保利茂・内閣官房長官から、ナショナル・プレスクラブ設立を急ぐよう

に要請する電話があった。さらに、外務省記者クラブ加盟の記者たちからも、同じ要請が新聞協会事務局にあつた」とクラブ会報に書き残している。

69年7月17日の新聞協会理事会はプレスクラブ設立方針を承認し、「プレスクラブ設立準備委員会」の設置を決定。7月31日に準備委員会の第1回会合が開かれ、「将来的にはプレスビルを作りたいが、それまでは既設ビルの一室を占有して本拠地とし、国賓クラスの会見はホテルを借りることを目的とする」と定めた。

また会員制度に関しては、海外のプレスクラブの大半は個人会員制だが、日本記者クラブは日本の報道界の実情を考慮して、法人会員と個人会員の二元体制をとり、新聞社、通信社、放送局などメディア各社から成る法人会員が運営の責任をとる体制となつた。

9人。

11月13日には、政財官など各界の代表600名を招待して、丸の内の東京会館で創立披露レセプションが華々しく催された。

本田会長の提言から10年の歳月がたつていたが、設立方針が固まつてか

1969年11月1日、正式発足

名称は、「日本プレスクラブ」が最適との意見が多かったが、同名の組織がすでに存在していたため、「日



東京会館ローズ・ルームで開かれた創立披露
レセプション（1969年11月13日）

総会では規約承認のあと、18社から理事が選出された。引き続き、理事会の互選で、初代理事長に原四郎・読売新聞社常務取締役編集局長を選出した。原理事長は、初代事務局長に前田雄二・日本新聞協会事務局次長を指名した。

事務所もなく、クラブルームも持たない状況だったが、日本報道界の念願だった「ナショナル・プレスクラブ」である日本記者クラブが翌11月1日に正式に発足した。創立当初の会員社は137社、会員数は839人。

専務理事　土生　修一

らは驚くべき速さで進展し、わずか3カ月で誕生にこぎつけた。10月1日付けで、日本新聞協会・萬直次会長、日本民間放送連盟・今道潤三会長、NHK・前田義徳会長の3名が発起人となり、入会案内がそれぞれの加盟社に送られた。

創立総会は、69年10月31日に尾崎記念会館（現・憲政記念館千代田区）で開催された。

ニュースの発信基地として成長



日本記者クラブは、1969年11月1日、正式に誕生した。

創立までの事務作業のほとんどを日本新聞協会事務局が肩代わりしており、創立時の事務局も初代事務局長の前田雄二氏が日本新聞協会と兼務、専任の総務部長の春原昭彦氏も同協会からの出向だった。事務局も、新聞協会の一隅を利用していた。まことに土台となる組織作りから着手、経理、組織運営を担当する総務委員会、会見ゲスト選定などを担当する企画委員会、会員資格などを決める会員委員会の3委員会を設置した。活動の中核となる企画委員会は第1回会合で「国賓、公賓を招くほかニュース性のあるゲストを招く」との基本方針を決定した。

記者会見は、70年1月13日にエドガー・フォール元フランス首相をとつてホテル・ニューオータニで行われた。司会は原四郎初代理事長（読売）が務めた。



日本記者クラブの誕生で、それまで同協会からの出向だった。事務局も、新聞協会の一隅を利用していた。まことに土台となる組織作りから着手、経理、組織運営を担当する総務委員会、会見ゲスト選定などを担当する企画委員会、会員資格などを決める会員委員会の3委員会を設置した。活動の中核となる企画委員会は第1回会合で「国賓、公賓を招くほかニュース性のあるゲストを招く」との基本方針を決定した。

記者会見は、70年1月13日にエドガー・フォール元フランス首相を迎えて、「昼食会」の形式とつてホテル・ニューオータニで行われた。司会は原四郎初代理事長（読売）が務めた。

日本記者クラブの誕生で、それまで同協会からの出向だった。事務局も、新聞協会の一隅を利用していた。まことに土台となる組織作りから着手、経理、組織運営を担当する総務委員会、会見ゲスト選定などを担当する企画委員会、会員資格などを決める会員委員会の3委員会を設置した。活動の中核となる企画委員会は第1回会合で「国賓、公賓を招くほかニュース性のあるゲストを招く」との基本方針を決定した。

記者会見は、70年1月13日にエドガー・フォール元フランス首相を迎えて、「昼食会」の形式とつてホテル・ニューオータニで行われた。司会は原四郎初代理事長（読売）が務めた。

日本記者クラブの誕生で、それまで同協会からの出向だった。事務局も、新聞協会の一隅を利用していた。まことに土台となる組織作りから着手、経理、組織運営を担当する総務委員会、会見ゲスト選定などを担当する企画委員会、会員資格などを決める会員委員会の3委員会を設置した。活動の中核となる企画委員会は第1回会合で「国賓、公賓を招くほかニュース性のあるゲストを招く」との基本方針を決定した。

記者会見は、70年1月13日にエドガー・フォール元フランス首相を迎えて、「昼食会」の形式とつてホテル・ニューオータニで行われた。司会は原四郎初代理事長（読売）が務めた。

この歴代首相が在任中にクラブで会見を行っている。

70年代の特筆すべき会見としては、

和天皇会見（75年10月）、鄧小平会見（78年10月）があげられる。

フォード大統領の来日は、米国大統領として初訪日であり、日米戦後史の大きな節目となつた。クラブは渡辺誠毅理事長（朝日）が駐日米国大使に大統領宛ての招請状を手渡すなど積極的に働きかけて実現した。会見の模様は、国内はもちろん米国にも生中継され、「ニュースの発信基地」としての日本記者クラブを内外に印象づけた。

76年7月には、日本メディア界待望の日本プレスセンタービルが竣工し、クラブもビル内に移転した。

80年代に入ると世界は冷戦体制が

揺らぎ激動の時代に入るが、サッチャー英首相、ミッテラン仏大統領、アラファトPLO議長、アキノ大統領など国際的に注目をあびた指導者が相次いでクラブで会見し、世界の鼓動を日本メディアに直接、伝えてくれた。

ゲストの顔ぶれも、政治、経済分野だけでなく、プロ野球の王貞治選手、冒険家の植村直己さん、俳優の森繁久彌さん、吉永小百合さんなど多岐にわたり、多方面で活躍した。また会見以外の活動としては、74年度に、大きな業績をあげた会員、あるいは会員社所属のジャーナリストを顕彰する日本記者クラブ賞が制定された。2012年度には、会員以外に対象を広げた日本記者クラブ賞特別賞が新設された。

前例のない昭和天皇の記者会見は、初訪米の帰国直後に皇居内で実現した。戦争責任や原爆投下に関連する質疑応答もあり、昭和天皇の肉声を記録した貴重な歴史資料となつた。鄧小平氏は日中和平友好条約批准のため来日し、会見に応じた。それまで中国指導者が中国国内も含め記者の質問を受ける形で記者会見に臨んだことはなく、これが初めてとなつた。今もたびたび引用される「尖閣諸島棚上げ論」はこの時の発言だ。その後も、華国鋒、胡耀邦、李鵬、江澤民など中国の歴代指導者がクラブでの会見に応じてきた。

90年、初の党首討論会開催

90年代は、総選挙公示前の党首討論会開催がクラブ史を飾る大きな出来事だった。90年1月、主要政党5党の代表者がクラブを訪れ、「総選挙前に各党党首による討論会を日本



この時期の大型会見としては、ゴルバチョフ・ソ連大統領の会見（91年4月19日）が語り継がれている。北方領土をめぐる海部俊樹首相との首脳会談が長引き、当初の予定が8時間以上ずれ込み、会見開始は日付を越えた午前0時半すぎだった。

2005年 ウェブサイトが誕生

特に動画配信の開始は、会見情報の発信の点で革命的ともいえる変化だった。09年10月にスタートした動画配信サイト・ユーチューブの「日本記者クラブチャンネル」では、原則として日本記者クラブが主催する全ての会見を撮影し、全編を公開している。早ければ当日、遅くとも翌日には無料で一般の人も見ることができ、現在までに1800本を超える動画を掲載している。また、会見動画導入以前についても、重要な会見については発言の録音をウェブサイトの「音声アーカイブ」で公開している。

記者クラブで開催してほしい」との
党首連名の依頼状を持参した。クラ
ブはこれを承諾して2月2日に5党
党首討論会を初めて実施した(写真)。
NHK、各民放が全国中継し、各紙
も大きく扱うなどビッグニュースと
なり、これ以降、参院選も加わり国
政選挙公示前の党首討論会はクラブ
の「名物イベント」となった。さらに、
応用編として、自民党や野党第一党
の党首選でも候補者による討論会が
行われるようになつた。また、最初
の党首討論会でプレスセンタービル
10階の大ホールを確保するのに苦労
した経緯もあり、ビルを所有する日
本プレスセンターと交渉し、92年か



駆けまわる時代が到来した。この大変化を受け、クラブから的情報発信も時代に適応したものになつていった。

な記者会見の文字記録などの掲
開始。ウェブサイトはその後、
ユーチュアルを重ね、現在は文字記
載、会見出席の申し込みや貸賃申
約状況の確認も可能になつた。

05年11月にクラ
ブのウェブサイト
を立ち上げ、主要

く心配が持ち上がつた。
これらをめぐる苦労など
あるが、理事長の渡辺（
朝日・社長）の細々とした
大胆な会員社対策のおか
機は回避できた。

予期せぬ経験としては、飲食業者としての苦労が思い出される。ケータリング・サービスをお願いするアラスカさんは、伝統の洋食を誇る老舗。和食の提供に難色を示されたのには、参った。しかし、やがて板さんも入り、今日のスタイルができあがつた。確か、飲み物売り上げ

く心配が持ち上がりつた。
これらをめぐる苦労話は山ほどあるが、理事長の渡辺誠毅さん（朝日・社長）の細心にして大胆な会員社対策のおかげで危機は回避できた。

負担で工事しなければならないが、セメントも鉄筋も、価格が一挙に倍以上に跳ね上がった。おまけに、民放連加盟の全社がプレスセンタービル会社の株主から抜け、クラブからも出てい

クチンと思つていた。だが、73年秋、「石油ショック」が襲来した。クラブ内装はクラブの財政

の何パーセントかがクラブにバックされる契約を、當時の望月豊社長、谷沢重夫専務に承知していただいた。会員の皆さん、クラブ財政への貢献だと思つて大いに呑んでください。

石油ショック乗り越え拡大、活性化

第2代経営部長

かつら けいいち
桂 敬一

です」と、市長の列席を促したら、彼は杖をつきながら出てきてくれた。そうか、記者クラブとはたいへんなものなんだ。「呼び屋」の経験までさせてくれるんだと、思った。言えないことがまだたくさんある。だが、秘密を守るのも、裏方の重要な仕事の一つと観念している。

のちにフランス大統領となるミッテラン氏を招いたときも、飛鳥田事務所に直で通い、異色のゲストを招くことができた。「これほどのステーツマンが会見に臨むときは、招待者が接伴大使格で同席するのが外交儀礼

げて頑張つた。しかし、もつとバラエティーも欲しい。故アジエンデ・チリ大統領の未亡人が訪日のときは、招待主の日本原本水協を口説き落とし、未亡人にきてもらつた。横浜市長の飛鳥田一雄元社会党委員長が、

りつぱなお神輿にはりつぱなご神体が要る。米フォード大統領や昭和天皇の会見実現のためには全力を挙



建設中のプレスセンタービルの何バルセントかがクレジットにバックされる契約を、當時の望月豊社長、谷沢重夫専務に承知していただいた。会員の皆さん、



中国要人として初めて会見に応じた鄧小平副首相（壇上右から2人目）左は代表質問に立つ小島氏

“大きさ”に圧倒された鄧会見

元日本記者クラブ副理事長
(日本経済新聞出身) 小島 じま あきのぶ 章伸

1997年2月19日、「鄧小平氏死去」の報に「あの日」の記憶が鮮明によみがえった。78年10月25日午後4時、日本記者クラブでの鄧副首相会見で代表質問に立ったときのことである。たまたま副理事長在任中というめぐり合わせではあったのだが、いまでも筆者の脳裏に強く焼

きついているということは、やはり記者冥利というべきだろう。

「鄧小平氏が来日したら、ワントランスの記者会見は何としてでも日本記者クラブで！」それは酒井新二理事長（共同）以下、当時のクラブ執行部の強い願望であり、ナショナル・プレスクラブとしての使命感でもあった。しかし從来、中国の要人は「習慣がない」ということで公式会見に応じたことがない。壁は非常に厚かった。

そこで理事会、企画委員会、事務局が一致協力、同年の夏から秋にかけて外務省、中国大使館、駐日中国記者など関係筋に粘り強い働きかけを続けることとなつた。

そんな努力が実つて「可能性あり」の感触を得たのは9月初め。「代表質問の形にしてほしい」などいくつかの条件はつけられたものの、「まずは扉を開くべし」ということから中国側の希望を受け入れて会見を実施することになつた。

そして当日。NHK、民放の生中

継を含めてクラブ会員を中心に会見場（10階ホール）は400名におよぶ内外取材陣でふくれ上がつた。聞きたいことは山ほどある。会員諸氏からの要望も聞き、質問書作成グループが念入りに質問をまとめ上げた。

きついているということは、やはり記者冥利というべきだろう。

「鄧小平氏が来日したら、ワントラ

ンスの記者会見は何としてでも日本記者クラブで！」それは酒井新二理事長（共同）以下、当時のクラブ執行部の強い願望であり、ナショナル・プレスクラブとしての使命感でもあった。しかし從来、中国の要人は「習慣がない」ということで公式会見に応じたことがない。壁は非常に厚かった。

そこで理事会、企画委員会、事務局が一致協力、同年の夏から秋にかけて外務省、中国大使館、駐日中国記者など関係筋に粘り強い働きかけを続けることとなつた。

そんな努力が実つて「可能性あり」の感触を得たのは9月初め。「代表質問の形にしてほしい」などいくつかの条件はつけられたものの、「まずは扉を開くべし」ということから中国側の希望を受け入れて会見を実施することになつた。

そして当日。NHK、民放の生中継を含めてクラブ会員を中心に会見場（10階ホール）は400名におよぶ内外取材陣でふくれ上がつた。聞きたいことは山ほどある。会員諸氏からの要望も聞き、質問書作成グループが念入りに質問をまとめ上げた。

えてくれればくるほど時間は押し気味。尖閣問題に入ろうとするころ本固有の領土であることを信じて疑わない：云々といしさか勢い込んだ聞き方となつた。

そのた

め、強引に押し込む格好で、同時に筆者の気持ちの中には、もう一つ、自分なりに気負うものがあった。当時、問題化していた尖閣諸島問題について中国側の考えを最高実力者の口から直接引き出したいと好条約交渉に当たつて、この問題には触れないということを前提に話を進めてきた。一方、取材する側にも日中関係のからみから対中自己規制的な雰囲気があり、この問題を質問するかどうかは意見が割れていた。

「どんなふうに聞き出すか」—私は自問自答を繰り返していたが、その日の昼に懇談した外務省幹部の「（尖閣問題は）聞いてほしくないなあ。どうしてもやるというなら政府の公式見解を用意しなくては」というひと言が私の質問への気持ちを決定的なものとした。

問題は1時間と限られた時間内に会見を成功裏に終わらせることができるかどうかだ。日中、米中関係、アジア情勢、中国の現代化計画：と一応予定通りの質問をこなしはしたものの、鄧小平さんがていねいに答

えてくれればくるほど時間は押し気味。尖閣問題に入ろうとするころ本固有の領土であることを信じて疑わない：云々といしさか勢い込んだ聞き方となつた。

そのため、強引に押し込む格好で、同時に筆者の気持ちの中には、もう一つ、自分なりに気負うものがあつた。当時、問題化していた尖閣諸島問題について中国側の考えを最高実力者の口から直接引き出したいと好条約交渉に当たつて、この問題には触れないということを前提に話を進めてきた。一方、取材する側にも日中関係のからみから対中自己規制的な雰囲気があり、この問題を質問するかどうかは意見が割れていた。

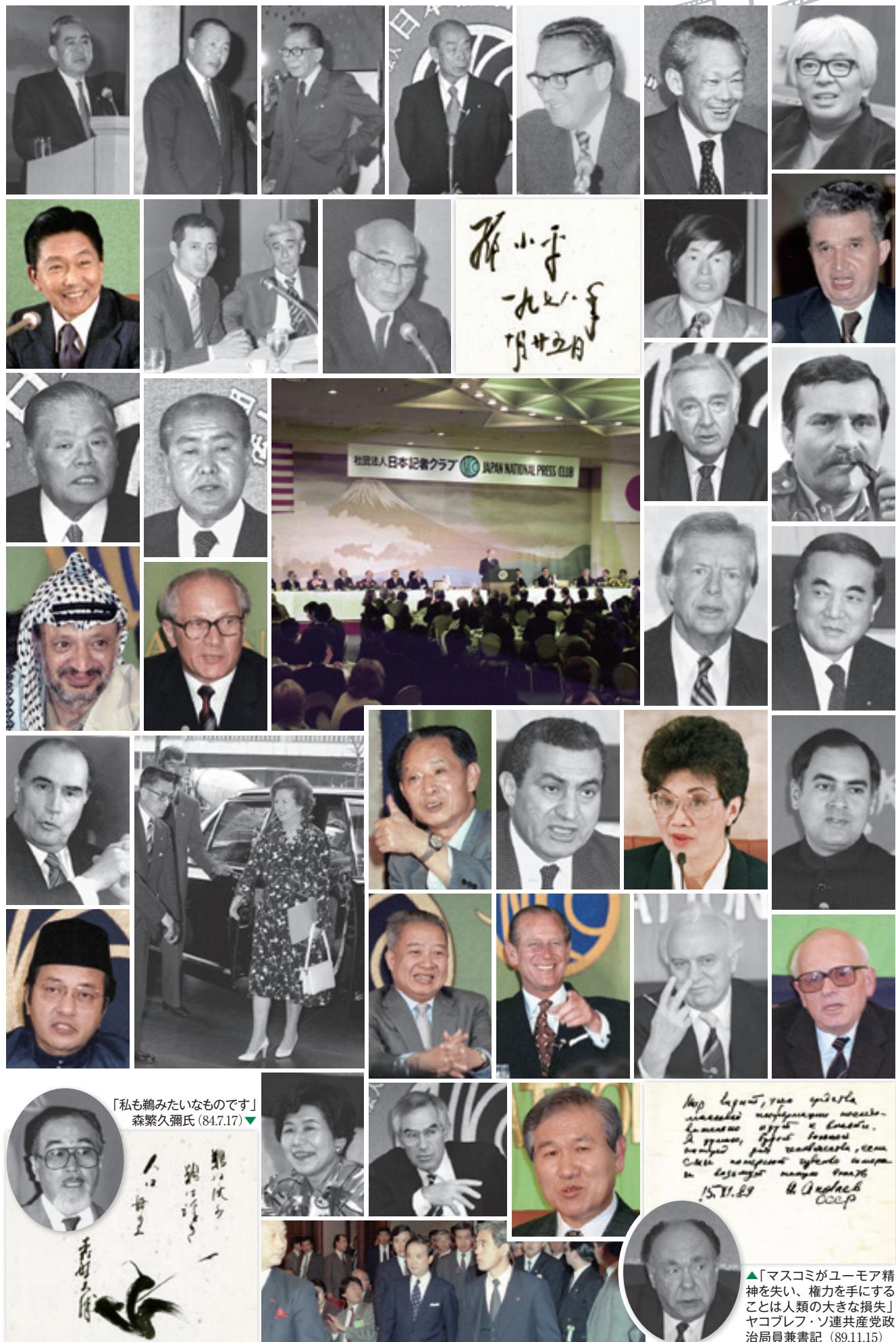
「われわれの世代の人間は知恵が足りません。：次の世代はきっとわれわれより賢くなるでしょう」というあの「尖閣タナ上げ」の名答弁を返してきたのである。

小柄な鄧小平さんがあのときほど大きく見えたことはない。満場息のみ、圧倒されたようだつた。会見が終わつて外務省はほつとし、帰社した筆者のもとには「感銘を受けた」というテレビ視聴者からの電話が何本かかかってきた。

◆

あの会見から40年余、いま「Gゼロ時代」といわれる歴史的変革期にあって21世紀の新秩序構築に世界のリーダーたちの眞の「賢さ」が問われる。

* 1997年3月号掲載原稿を一部改訂



「私も鵜みたいなのあります」
森繁久彌氏(84.7.17)▼

Но, кажется, что придется
заняться изучением нового
материала еще в ближайшем
будущем, потому что некоторые
вещи, которые я изучал, пока
еще неизвестны. Так что
я буду стараться изучить
новые материалы как можно
быстро.

▲「マスコミがユーモア精神を失い、権力を手にすることは人類の大きな損失」
ヤコブレフ・ソ連共産党政
治局員兼書記（89.11.15）

1991 ▶ 2008







3 2009年～2016年

時代を画した大震災、公益移行、デジタル化

私が日本記者クラブ事務局で仕事をしたのは2009年4月から16年5月までの7年間だった。それまでの34年間は新聞記者だった。同じジャーナリズムの世界だが、クラブ事務局は自分で記事を書いて発信するわけではない。クラブ加盟社の記者が記事を書くために取材する機会、つまり記者会見を企画し組織することが中心だ。その日々の中で、「東日本大震災」「公益社団法人への移行」「デジタル・アーカイブ」の三つを振り返りたい。50年のクラブの歴史の中で、それぞれが時代を画した出来事だった。

「これはとんでもないことになる」と息をのんだのは、押し寄せる津波を見た時だった。そして、東電福島原発の事故が伝えられる。日本という国はどうなるのか。この社会は持

ださい」と即答した。震災前のクラブなら「そんな急に言われても」とためらうところだ。だが、こちらが会見の企画に動き出す前に、ゲストの方から会見したいと言ってきた。天野さんの会見には180人が出席し満員だった。通訳もあり、外国メディアも多かった。

世の中がクラブを必要としている。いつまでも呆然としている場合ではない、と活を入れられた気がした。記者会見を担当する企画委員会と相談し「3・11大震災」と題したシリーズ会見を始めた。3・11に関連するテーマなら、どんな人でも話を聞こう、話す場を提供しようとウイングを広げた。被災地の議員、福島県双葉郡の町村長、原発立地県の知事から建築学会、感染症学会、生命保険協会、被団協（日本原水爆被害者団体協議会）といった全国組織、さらには復興構想会議への要望・提言、緊急医療の教訓までさまざまな立場の人を招いた。このシリーズに限らず、記者会見の回数は増えた。多くは震災がテーマだった。



東京電力福島第二原発3号機の原子炉圧力容器を見上げる取材団（2014年1月15日／日本経済新聞社提供）

南三陸町の防災対策庁舎跡を視察する岩手宮城取材団（2014年8月30日）

東日本大震災関連特集の会報の紙面

した。発災直後の写真特集（11年4月号）、OBの科学記者による原発報道座談会（同年6月号）、被災地4紙編集局長の座談会「闘う地元紙」（同年7月号）などの大型企画はいま読んでも大事な証言だ。

4年、5年たち東京の新聞やテレビから震災のニュースが次第に消えても、会報は「被災地通信」（19年1月号から「被災・防災・減災 最前線」に改題）のページを絶やさなかつた。

被災地や福島原発へ取材団を何回も派遣した。全国紙やキー局なら記者も行けるし、東電や取材先もそれなりに便宜を図ってくれそうだ。だが、全国各地の記者にとって出張取材できる機会はそれほどない。現場を歩いて自分の目で確かめ

る手助けになれば、と企画した。3・11は日本記者クラブが自分の存在理由を確認し、バージョンアップするきっかけになつたのかもしない。記者会見などプレス行事が年間200回を上回る「フル稼働」はいまも続く。

公益法人移行 厄介な袋小路

震災直後の2011年4月1日、日本記者クラブはそれまでの社団法人から公益社団法人に移行した。これはかなり厄介な作業だった。クラブ会報11年4月号にも書いたが、この機会に改めて書き残しておきたい。

「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」に基づき、日本中の団体が公益法人か一般法人かを選ばなければならなくなつた。内閣総理大臣の認可を得るため、膨大な書類を提出し公益認定等委員会（認定委）の審査を受ける。

理事会や総会の公益移行決定を受け、09年4月から新定款や文書を作り始めた。10年7月に移行認定申請書、別紙17件、添付書類14件をネットで送信して提出した。事前審査する認定委事務局に説明に通うと、申請書の手直しを求められる。12件の

修正に同意した箇所は書き直し、承服できない箇所は説明を重ね理解を得る。2年間の長丁場の作業だった。予定した11年4月の移行には間に合つた。だが、骨が折れた。同時に疑問も残つた。

税金を補助金や事業費用として投入する公益法人なら、政府が監視し規制する理屈も成り立つだろう。しかし、日本記者クラブは政府からの補助金は受け取っていない。しかも設立以来、先輩会員が努力して積み立てた内部留保金が幸い、残つている。この自力で集めた積立金の使い道に政府の許可が必要、という法律の仕組みは、納得がいかなかつた。

民間活力を公共のために生かす、という美しい建前の一方で、純民間の事業に政府が規制の網をかぶせ、口を出す。これは矛盾ではないか。日本中の民間組織が苦労しているだろうに、反発の声が広がらないのも不思議だつた。

記者会見は共益でなく公益

法律が定義する公益目的事業は「不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与するもの」だ。クラブは「記者会見の主催」を公益目的事業の筆頭に掲げた。記者会見はクラブ会員だけが利益を得る「共益」ではない。

会員のジャーナリズム活動や報道を通し不特定多数の読者の利益に寄与するから「公益」だ。そういう考え方を繰り返し認定委に説明しなければならなかつた。

デジタル・アーカイブ 宝の山をひづでもたタダで

日本記者クラブの財産とは何だろう？ 東日本大震災後、クラブの在り方を問い合わせ、公益法人移行の中での「公益に開かれた活動」が求められた。



そこで浮かんだのが、「宝の山」の再発見、再活用だった。1969年の設立以来、膨大な記者会見の記録が残っている。それを公開し、利用の道を作れないか。会見を録音したカセットテープやオープンリールは3800本も段ボール箱に詰め込まれている。撮影したネガフィルムもあれば、クラブ会報も紙のまま保存している。会見をテープ起こして作った文字記録を会報増刊として発行した時代もあった。放置しておけば紙もテープも劣化し、読めなくなるし再生できなくなる。これらの記録こそ貴重な資料であり、クラブの財産ではないか。

でも、どうやって公開するの？

デジタルだ、ネットだ、と社会は動いている。テープも、フィルムも、紙もデジタル化し、クラブのウェブサイトに載せれば、いつでもアクセスできるのではないか。

でも、どうやってお金を工面するの？

2014年度はクラブ設立から45年目だ。記念事業として予算に組み込めるのではないか。この時しかチヤンスはない。そんな発想を「デジタル・アーカイブ」と名付け、創立45周年記念事業として理事会と総会で承認された。

ユーチューブで動画公開



クラブにとつてデジタル化の試みはもうじき始まつた。記者会見の動画公開だ。

いま、ユーチューブにある日本記者クラブ・チャンネルでクラブの記者会見がタダで見れる。09年10月から始めた。

開始にあたつていくつかの前提条件があつた。第一にクラブとしてはお金も人手もかけられない。第二に、いつでも、どこでも、誰でも見られる仕組みで公開する。第三に、無料で公開し収入を求める。

第一の条件により、高価なビデオ機材は買えないし、専門家も雇えない。普通のビデオカメラ一台だけを固定し、学生アルバイトに撮影してもらう。自前でサーバーを確保する方法はとれない。

第二の条件により、既存のウェブサービスを利用するしかない。いくつかある中でユーチューブに的をしつったのは、当時、すでに防衛省や京都大学といった政府や教育機関がユーチューブで映像を公開していた

からだ。クラブの会員だけがパワードでアクセスできるという閉ざされた方式は採用しなかった。

文化が違ったメディア新興企業

渋谷にあつたユーチューブのオフ

イスを訪ねた。若い担当者が一人で対応する。

ユーチューブのビジネスモデルは映像の前後や画面に廣告を入れ、広告収入を動画投稿者とユーチューブが分け合うというものだった。こちらの希望は前述の「第三の条件」だつた。公益法人移行に際し、記者会見主催は公益目的事業という立場であり、その動画公開も公益事業となるだろう。それにより収入が発生した場合、どう会計処理すればいいのか。ゲストスピーカーに分配しないといいのか。あれこれ説明し「広告なし」で決まった。政府や大学など公共機関に限つて広告をつけない枠組みがある。日本記者クラブの名前をおそらく初めて耳にした担当者は、公共機関に準じて扱える、とその場で判断した。

「それでは、ユーチューブの収入もないことになるけど?」「たしかに収入はないが、日本記者クラブのチャンネルがユーチューブに存在し、重要な記者会見の映像がユーチューブなら見られるということで元がとれます」彼はそんな答え方で、こちらをうならせて。現場に権限を与える、判断させる。従来の日本企業の組織重視・前例踏襲とは違う新興メディア企業の文化を垣間見た。

記者会見の新しスタンダード

会見動画の公開はこうして始まった。ゲストの答え方も記者の質問も、声や表情も含めて後々までチェックされる。かつて記者会見といえば、その場にいる記者だけが情報を独占し、読者や視聴者はゲストが何をどのように話したか直接知る手段はなかつた。そういう旧来の会見に代わる新しいスタンダードをつくり出した、と言えるかもしれない。

45周年事業でデジタル・アーカイブは記者会見の▼動画▼詳録(文字記録)▼音声録音▼写真と広がつた。クラブ会報も09年7月号からPDF版をサイトで同時公開していくが、創刊号(1970年3月号)から全号をサイトで読めるようになった。

「宝の山」には毎日、新しい会見や情報が追加される。いつでも、誰でも、どこでも、無料で、無尽蔵の宝物を利用してほしい。

前専務理事 中井 良則



未来へ向けて

分断化の時代、記者の連帯感が必要



上：386人が参加した安田純平さんの会見（2018年11月2日） 下：災害報道をテーマにした記者研修会には109人が参加した（2019年8月29日、30日）

例えば、2018年度の会見出席者数順位は、1位「シリアで人質になり解放されたジャーナリスト安田純平」、2位「危険タックルで問題となつた日大アメフト選手」、3位「サッカー日本代表監督を解任されたハリルホジツ」だつた。創立1年目には「自主ゼミ」として継続しているものもある。また、毎年夏の「記者研修会」も全国各地から100人前後の中堅、若手記者が参加している。

会見、ゲストの多様化、会見数の増加、会見以外の活動強化——直近10年間の日本記者クラブの活動の特徴として、この三つをあげたい。

まずゲストの多様化。「訪日外国人をを迎えるメディア自前の会見施設」がクラブ創立の大きな目的だったが、その後、ゲスト枠はニュースの当事者や解説者に広がり、多様化がますます進んでいる。

例えれば、2018年度の会見出席者数順位は、1位「シリアで人質になり解放されたジャーナリスト安田純平」、2位「危険タックルで問題となつた日大アメフト選手」、3位「サッカー日本代表監督を解任されたハリルホジツ」だつた。創立1年目には「自主ゼミ」として継続しているものもある。また、毎年夏の「記者研修会」も全国各地から100人前後の中堅、若手記者が参加している。

純平さん」、2位「危険タックルで問題となつた日大アメフト選手」、3位「サッカー日本代表監督を解任されたハリルホジツさん」だつた。創立1年目には「自主ゼミ」として継続しているものもある。また、毎年夏の「記者研修会」も全国各地から100人前後の中堅、若手記者が参加している。

次に会見数の増加。創立1年目の会見件数は52回、1970年代半ばから100件台になり、2011年の東日本大震災を契機に200件台が常態化した。クラブ主催のプレス向け行事（記者会見、昼食会、記者ゼミ、取材団）のこれまでの最高件数は15年度の252回となつて。これからも質・量とも「ニュースの発信基地」としての機能を果たしていくべきだ。

会見以外の活動も知つてもらいたい。最近では現役記者を対象にした研修に手応えを感じている。13年度に始まつた「記者ゼミ」は、各社の第一線記者たちにベテラン記者やメディア専門家が社壁を越え、取材の心構えからノウハウまでを伝授する実践講座。各社の横

断組織であるクラブならではの事業だ。テーマはIT活用法から調査報道、経済取材まで、年間テーマを決め、ほぼ毎月、実施している。「ゼミ」終了後も参加者有志で「自主ゼミ」として継続しているものもある。また、毎年夏の「記者研修会」も全国各地から100人前後の中堅、若手記者が参加している。

今や「分断の時代」と言われるが、クラブは「記者」職を連帯の絆に、各社の記者が社の壁を越えて協力しき磋琢磨できる場所であり続けたい。

最後に課題をあげてみたい。

ネット時代になり、会見場からパソコンで直接、原稿や発言メモを編集局に送れるようになつた。この影響で会見中、パソコン作業に集中している記者が目立つ。これでは、ゲストをうならせる鋭い質問を考える余裕はない。

プロの記者集団とニュースの当事者との「真剣勝負」のなかから、ニュースの核心に迫る言葉が飛び出し、それが大きく報道される。どうすれば、そんなライブ感ある会見をたくさん実現できるのか。これは大きな課題だ。記者同士が質問力を競う報道文化がクラブの会見を通じて育つていけば、とも夢想している。

会見が持つ「ナマの魅力」をこれからも伝えていきたい。

クラブは、「発信基地」とともに、「歴史の証言者」としての顔もある。半世紀の歴史で、おそらく会見数は6000回を超えて。創立当初からの録音、録画データが膨大に蓄



歴代理事長からのメッセージ



初代
原 四郎

(読売新聞社)

1969年11月～1971年12月



2代
高田 秀二

(共同通信社)

1972年1月～1973年1月



3代
渡辺 誠毅

(朝日新聞社)

1973年3月～1978年5月



4代
酒井 新二

(共同通信社)

1978年5月～1981年5月



5代
若松 信重

(中日新聞社)

1981年5月～1983年5月



6代
新井 明

(日本経済新聞社)

1983年5月～1988年7月



8代
水上 健也

(読売新聞社)

1989年5月～1993年1月



9代
鮫島 敬治

(日本経済新聞社)

1993年1月～1994年5月



10代
松下 宗之

(朝日新聞社)

1994年5月～1996年6月



11代
加藤 博久

(読売新聞社)

1996年6月～1999年5月

21世紀の新パラダイムに貢献を



7代理事長（1988年7月～1989年5月）

中江 利忠
(朝日新聞社)

当クラブで30年前に刊行された『二十年の歩み』で私は、天安門事件でもしたたかに生き残った李鵬・中国首相の、クラブでの会見（89年4月14日）を司会

した印象を語りました。2019年7月に90歳で他界したその李鵬さんが残していく「中日友好くことを祈つて」の遺言が、20年春の習近平・国家主席の来日でちゃんと果たされるかどうかを見届けたい気持ちでいっぱいです。

7代理事長としてはたった10ヶ月だけでしたが、理事としては10年余り務めさせていただいた私の記憶を辿つてゆくと、こうした歴史的会見のほか、森英恵さんや吉永小百合さんら幅広く層を広げた会見の実績や、会員たちの特ダネなど生々しい「とつておきの話」の記録が、クラブの発展に大きく役立つてることが分かります。

21世紀も5分の1を経過しつつある今、「トンプ現象」も克服して、自由と平等・共生とが両立する新たなパラダイムの構築に、日本記者クラブが着実に貢献できることを、祈つてやみません。

12代理事長（1999年5月～2003年3月）

杉田 亮毅
(日本経済新聞社)

創立30周年、両陛下の温かさに触れて



任期中の私の思い出は、何といつても天皇と皇后両陛下（現上皇ご夫妻）を初めて日本記者クラブにお招きして記念パーティーを開いたことだ（99年11月1日）。普通なら300人程度でいっぱいの10階ホールに会員やゲストが641人詰めかけ、まるでイモ洗いのような状況になつた。事前に両陛下のお体に触らぬよう注意はしていたが、あまりの人数で、そうも言つていられないような状態。私と木戸塗副理事長は、まるで両陛下の「ボディガード」になつていた。当初1時間の約束だったが、天皇ご自身が時間延長を決められ、会員との会話、交流に努められた。両陛下の温かい人柄が余すところなく示された。実はこの日、10階ホールにご案内するエレベーターの扉が開かず、再び1階に降りてしまつという「事件」が起きてしまつた。皇后陛下からは、慰めの言葉を頂いたが、直後の理事会に報告していただいた折、直接両陛下にお詫び申し上げる機会があつた。両陛下は「そんなこともありましたかねえ」と。今や上皇陛下、上皇后陛下になられているが、本当に気持ちの優しいお二人である。

（同社参考）

13代理事長（2003年3月～2005年5月）

北村 まさと
（毎日新聞社）



今こそジャーナリズムの正念場

2003年春、理事長に就任した私は、会報の挨拶文に「情報技術革命の中で、マスコミ界は大波に洗われています」と書きました。それから16年、大波は大洪水になりました。

誰もが自分の意見を世の中に直接伝えることができ、多種多様な議論が生まれる。そのこと自体は良いことです。けれども現実は身勝手な思い込み、偏見に満ちた誹謗中傷、匿名による無責任な言いたい放題があふれています。

興味本位で扇情的な議論に押されて、社会を方向づける本質的な課題は影が薄くなっています。

今こそジャーナリズムの正念場ではないでしょうか。幸いなことに、国民の多くは、新聞の伝えられる情報に信頼をおいています。日本記者クラブに集結する報道各社とそれを支えるジャーナリストの真摯さは失われていません。

今、私たちは何をこそ考えるべきなのか。そのことを日本の社会に根付かせる力が、ここには残っているはずです。

50周年を迎えた日本記者クラブが、その影響力を一層高めることを願っています。

（同社名譽顧問）

14代理事長（2005年5月～2009年5月）

滝鼻 たくお
（読売新聞社）



攻めの質問でニュースを引き出そう

日本のナショナル・プレスクラブである日本記者クラブが創立50周年を迎えたことに深い感動を覚えるとともに、数多くの先輩記者たちが築いてきたクラブの歴史に敬意を表します。

私が理事長に就いた2005年当時、クラブはニュースの発信基地の使命を当然のこととして果たしていましたが、若干ではありますが「クラブがサロン化してないか」という心配がありました。例えば国際社会のニュースメーカーである人物が政府の設定するステージで会見する事例が多くなったこと、ニュースの最前線の記者たちがクラブから離れていったこと、などが、私の心配事でした。

この状況を改善するために、企画委員の努めた役割はことのほか大きかったと思います。

これから的重要課題としては、ナショナル・プレスクラブが、時の権力者から甘く見られないことです。一例を示せば、国政選挙前に行われる党首会見・討論会の在り方です。改善の方向を言えば、「クロスファイア」（質問攻め）の態度をもつと強めることです。ニュースはそこから生まれます。

15代理事長（2009年5月～2011年5月）

斎藤 史郎
（日本経済新聞社）



40周年パーティー、両陛下とひととき

10年前の2009年11月4日、10階ホールは500人に上るジャーナリストや招待者であふれかえった。クラブ創立40周年を祝うパーティーである。

会場の真ん中には当時の天皇、皇后両陛下、現在の上皇、上皇后両陛下。立たれたまま、列をなすジャーナリストたち一人一人と丁寧に言葉を交わされた。記者の中には大胆な輩もいて、ポケットから取り出した名刺を陛下に渡そうと試みて、お付きの方にそつと押しとどめられ思わず笑いがこぼれる一幕も。あるOB記者が陛下に「戦後60年、こんな平和が長く続いたことはありません。良い時代です」と語ると、陛下は「そうですか。江戸時代はもつと長かったですよ」と。一本取られた形となり、会場は終始和やかな空気に包まれた。時は民主党政権時代。お祝いには鳩山首相も駆けつけ、日銀総裁や経団連会長も。米国やロシアなど20カ国を超える駐日大使が駆けつけてくれた。クラブをめぐる政治・経済環境は激しく揺れ、ネットメディアも台頭し始めた。クラブは11年4月に公益法人に移行、記者会見件数は激増、ユーチューブを活用した日本記者クラブチャンネルも開設した。存在感が年々増すクラブが自由な言論の砦としてさらに強固な組織になることを願う。



16代理事長（2011年5月～2014年5月）

吉田慎一（朝日新聞社出身）



真の日本“記者”クラブを目指す岐路に

昨今のクラブの活動ぶりを見れば、設立当初の「日本最高の取材の場に」という願いは前進しつつある。だが流れはこのまま続くまい。基礎構成員であるメディア企業の退潮が加速してきたからだ。すでに加盟社数や財政に陰りが見え、個々の企業でも記者採用や教育への投資が減りつつある。

一方でジャーナリズムそのものはネットに拡大。NPOや公共意識に目覚めた専門家が新参入し、急速に戦場を広げ活性化している。伝統的メディアの作る情報社会の外側に、どんどん、「あち側の世界」が膨張しているのである。

このジレンマに対応するにはまず、ネットに広がった発信者をクラブに取り込み、膨張する情報社会すべてを相手にできる組織に変えることだろう。そして、ジャーナリズムを最後に担うのは記者だ。一企業ではやりにくい記者の教育をクラブの柱に据え直し、会員の経験やノウハウを伝承する公共の場を目指してほしい。それが「日本報道界のインフラ」であり続ける道だろう。この50周年は、眞の意味での日本“記者”クラブへ向かう岐路なのではないか。脱皮を期待したい。

（テレビ朝日ホールディングス代表取締役社長）

17代理事長（2014年5月～2017年5月）

伊藤芳明（毎日新聞社）



紛争地取材激変 後藤さん殺害で声明発表

2015年2月1日未明。シリアル取材中に過激派組織「イスラム国」（IS）に拘束されたフリージャーナリスト、後藤健二さんとみられる殺害動画がネット上に流された。「暴力を使ってジャーナリズムを脅かすテロ行為であり、（中略）今後とも断じて許すことはできない」。異例ではあったが、当クラブは直ちに声明を出した。

IS登場で紛争地の取材は激変した。主張を國際社会に発信するため、外国メディアの存在が必要とされた時代は過去となり、ネット空間を利用して自前で情報発信するISにとって、外国メディアは邪魔な存在でしかなかった。後藤さん殺害は、我々ジャーナリストが身代金要求のカードにすぎない現実を象徴していた。

翌年、ツイッターを駆使したトランプ氏が米大統領選を制したことで、既存のメディアを超えて、自らに都合の良い情報だけを、有権者に向けて一方的に発信する傾向が世界の政治指導者に一気に広まつた。そんな時代だからこそ、ゲストとの丁々発止のやりとりを重視する日本記者クラブの会見の場は貴重である。そんな思いを強くした3年間だった。

（同社論説特別顧問）

18代理事長（2017年5月～2018年1月）

小田尚（読売新聞社）



強みは社を越えた相互協力

理事長職は「一身上の都合」で9カ月しか務められませんでしたが、理事や会員、事務局の方々に支えられ、充実した日々

を送ることができました。誠にありがとうございました。

新聞社を退職し、行政側にも身を置いて実感するのは、日本記者クラブの情報発信力です。話題の人物や専門家が記者会見に登場し、大きな報道につながっています。ニュースを引き出す質問力も寄与しているのでしょうか。

各社の枠を超えた相互協力が建設的に進んでいることも敬意を示します。中でも記者ゼミは実績あるベテランが各社の中堅・若手を鍛える日本記者クラブならではの場で、報道の質の向上に寄与していると確信しています。

現在、個人D会員に登録し、ヘビーユーザーとまではいきませんが、平均すれば、月3回くらいは記者会見や研究会に出席しています。

ジャーナリストとして時代を切り取る力や現場感覚を失わないようになる（？）のが目的ですが、以前に現場を共にした方のお元気な姿を拝見するのも楽しみになっています。

党首討論が映すリーダーの姿

(読売新聞東京本社特別編集委員) 橋本 五郎



企画委員として21年にわたって、国政選挙や政党の代表選挙を前にした討論に代表質問者として参加しました。代表質問にあたって一番心がけたことは、國民がもつとも疑問に思っていることをズバリ、厳しく聞かなければならぬということです。ただその場合、言葉はあくまでも丁寧で品よく、そして少々のユーモアがあればと思つてきました。

「私事で反論しません」

実際に丁々発止のやりとりができるかどうかについては疑問なとしませんが、私にとって記憶に残るものはいくつもあります。安倍首相が外務省出身の田中均さんをフェイスブックで批判したことや、自民党総裁選で福田康夫さんと麻生太郎さんが争ったときです(07年9月21日)。世論調査では圧倒的に福田さんが優位でした。そこで麻生さんは福田さんの半分です。女性の支持率はさらに低くなります。なぜだかわかりますか? 麻生さんは憤然として答えていました。「それじゃなんですか。私が女性にもてないということではありません。このことについてお伺いします。

安倍

橋本さんからのお言葉ですか

ら、しっかりと胸に刻んでいただきたいと思います。ただ、私は私事で反論したことには1回もありません。国の根幹に関わるような政策で間違ついたら間違つていると言うのは政治家としての義務だと思ってきました。

橋本さんがおっしゃったように、総理大臣としてそんなことに神経を集中するよりも、もつと大きなことを考えながらやつていくべきだなあというのは、まさにおっしゃる通りだと思ったところでございます。

これから随分月日がたっていますが、人が変わるのはなかなか難しいものだということを実感しています。

自民党総裁選で福田康夫さんと麻生太郎さんが争ったときです(07年9月21日)。世論調査では圧倒的に福田さんが優位でした。そこで麻生さんは福田さんの半分です。女性の支持率はさらに低くなります。なぜだかわかりますか? 麻生さんは憤然として答えていました。「それじゃなんですか。私が女性にもてないということではありません。このことについてお伺いします!!」

リーダー小粒に 質問力磨こう

共産党の志位委員長にはどうして聞かなければならないことがあります

* 1998年から企画委員



ました。共産党は自衛隊違憲論を唱えている唯一の政党です。違憲ということはこの世に存在してはいけないということです。ならば東日本大震災や御嶽山の噴火などで自衛隊が救出に向かうとき、なぜ共産党は「行つてはいけません」と阻止しないのか。私にとって極めて本質的な疑問でした。志位さんの答えは簡単に言うと、違憲論は変らないが、國民が認めている間は認めていいというものです。いまや天皇制についても当面容認論になっています。なし崩しに変わったようにも思われるのです。自分が年をとつたせいかもしれません、福田赳氏、大平正芳、中曾根康弘らの記者会見などには、時に哲學的な匂いもあったとしみじみ思います。しかし、リーダーの小粒化を嘆くのも一方的かもしません。私たち記者側がどれだけ核心を突いた聞き方をしているのか、そのためどれだけ爪を研いでいるのかも問われていることを忘れてはいけないからです。



勝負師小泉さん 原発ゼロ「公演」
知的でタフなファイター前川さん

(毎日新聞社客員編集委員) 倉重 くらしげ 篤郎 あつろう

司会役をした中では二つの会見が印象的だった。

――は、小泉純一郎元首相（2001年11月12日）である。安倍晋三新政権が発足してまだ1年足らずの時であつた。首相時代は原発推進者であったあの小泉氏がどうやら原発ゼロに切り替えたらしい、という情報が伝わってきた。3・11を受けて原発をどうするかが、なお時の政権の重要課題だった。元首相発言が与党政策決定に影響を与える可能性がある。多分取材攻勢を受けているだろ



410人が参加した小泉元首相会見



前川喜平前文科事務次官（左）の会見で司会を務める倉重氏

ゼロ方針が定めれば技術革新がそれを解決する、と述べた。

弁護士を通じて会見を承諾してもらつた。会見者と司会役が事前に打ち合わせをすることはめつたにない。当日会見直前に短く進行を確認するだけだ。ただ、前川氏のケースでは前日にクラブに来ていただき、弁護士を交えて、こちらの聞きたいポイントを整理してお話しした。渦中の人に対してそれなりの配慮をしたつもりであった。

ただ、結果的にそれは必要なかつた。会見当日の前川氏は気後れせず、事件の筋と本質を実に分かりやすく落ち着いたバリトンで語った。キーマンの実名まで明らかにし、高い説明能力と戦闘意欲を感じさせた。

むしろ司会の仕事は、記者の質問をどうさばくか、だった。時間切れで半端に切り上げるのは最悪だ。日

本記者クラブに来たからには全ての

最後の10分はその時点で手を挙げて
疑問に答えてもらう、と腹を決めた。

いた数人の記者にはそのまま立つて
もらい、最後の人が納得して着席す

るまでは質疑を継続した。計二十数人の質問を受けたことになる。

知的にタフであつた。官僚も捨て

たものではない、と思われた方もい
このではないか。こ後続がない。

*2009年から企画委員
たのではないが、たた後継がない

*2009年から企画委員

そこで小泉事務所宛てに会見要請の紙を送つてみた。当クラブは日本の新聞、テレビ各社を網羅、ここで会見すれば、1回で済みますよと。そこが効いたらしい。時間を置かずOKが来た。彼もまた退陣後の仕事として、原発ゼロで政治的勝負をかけんとしていた節があつた。

当日満席となつた10階会見場は、直ちに小泉劇場と化した。イントロ

小泉事務所に紙で会見要請

そこで小泉事務所宛てに会見要請の氏へ送つた。名前は日本大

そこで小泉事務所宛てに会見要請の紙を送ってみた。当クラブは日本新聞、テレビ各社を網羅、ここで会見すれば、1回で済みますよ。

そこが効いたらしい。時間を置かずOKが来た。彼もまた退陣後の仕事として、原発ゼロで政治的勝負をかけんとしていた節があつた。

当日満席となつた10階会見場は、直ちに小泉劇場と化した。イントロ

りむしろ）を終えた。と当時の会報の会見録に書いた通りの展開だった。中身も分かりやすく、各社は大きく扱った。安倍首相を名指しで「原発ゼロは首相が決断すればできる」「郵政民営化よりはるかに環境がいい」と半ば挑発的に政策転換を求め、ゼロ主張を無責任として代案を求める論調には、核廃棄物の処分場が見つからないまま原発運転を続ける方

はボソボソと、次第に滑らかに、時には笑いを誘い、クライマックスでは両手を振り上げ激情を込め、ご本人の大好きなオーケストラを指揮するがごとく80分の公演（講演というよ

二十数人から質問受ける
いものである。
その時はまた当クラブにお呼びした
い貫性を保っている。継続は力なり。
いざれ実をつける時も来るだろう。
点と全く変わりなし、見事なほどの
に続く地方行脚。その主張も会見時
發のシンボルに押し上げる起点とな
ったことは間違いあるまい。いまだ

た。会見当日の前川氏は気後れせず、事件の筋と本質を実に分かりやすく落ち着いたバリトンで語った。キーマンの実名まで明らかにし、高い説明能力と戦闘意欲を感じさせた。

むしろ司会の仕事は、記者の質問をどうさばくか、だった。時間切れで半端に切り上げるのは最悪だ。日本記者クラブに来たからには全ての

印象深かつた「戦後」をめぐる企画

比取材団でアキノ大統領会見

(共同通信出身) 会田 弘継

短い日本記者クラブ会報委員長時代を挟んで、その前後計7年間にわたり企画委員会に関わり、最後の2年は委員長も務めた。

初めは陣笠委員のつもりだったが、共同通信出身のベテラン国際報道記者春名幹男氏の後任ということで、委員就任(2007年)後間もなく、08年米大統領選絡みの勉強会企画に駆り出されたことを思い出す。初の黒人大統領オバマが登場し、長引くイラク戦争とリーマン危機に

打ちひしがれていた世界に希望の光が差したように思えた。いま振り返ると浅い考えだった。

任期のほぼ真中で、東日本大震災に遭遇したが、当時は共同通信の編集委員を統括していたので、そちらの仕事に追われ、地震絡みのクラブ企画にあまり貢献できなかつた点は忸怩たるものがある。

任期中の2010年に、60年安保50周年を迎えて、戦後70周年の15年に退任するまで、折に触れ「戦後は終わっていない」という感を強くして、企画委員会の仕事に当たつた。



クラブのフィリピン取材団団長としてアキノ大統領と懇談する会田氏(2014年11月4日/マラカニアン宮殿/共同通信社提供)

委員長を嘱託された2014年のハイライトは、11月に14社29人を率いてマニラを訪問し、アキノ大統領(当時)と会見したことだ。お膳立てはすべて土生修一事務局長(現専務理事)と石川洋企画部長(当時)に負った。外信記者生活をピープルパワー革命(1986年)の取材から始めた身には、懐旧の情も催した。

マラカニアン宮殿で主要閣僚を同道しての大統領の長時間の会見、会見後にマンゴージュースを片手にし

ての懇談まで、至れり尽くせりの歓待に、記者団一同は当時の比政府が日本に寄せる思いを感じた。この訪比がレイテ沖海戦で特攻が始まった時期からほぼ70年目に当たり、戦後70年にあたる2015年には、ぜひ訪比を実現してほしいと願い、帰国後にコラムを執筆した。比島は太平洋戦争最大の激戦地であり、市民の犠牲も膨大な数だ。15年の海外慰靈はパラオと決まっていたが、あえて書いてみた。無理だといわれていたが、16年の天皇陛下訪比が決まった時には、得心がいった。

「戦後」をめぐっては、同じ共同通信出身で米国報道の先輩である松尾文夫さんの会見の司会を務めたことも忘れられない。『オバマ大統領がヒロシマに獻花する日』を出版しているので、時折一緒に痛飲した。

「戦後」をめぐっては、同じ共同通信出身で米国報道の先輩である松尾文夫さんの会見の司会を務めたことも忘れられない。『オバマ大統領

がヒロシマに獻花する日』を出版し、松尾さんの主張が徐々に浸透し始めた10年、企画委員時代だ。結局、16年に訴えは実現し、松尾さんは同じテーマで2度クラブで記者会見し、

83歳で日本記者クラブ賞を受賞した。松尾さんは日中・日韓・日朝の和解を訴え続けながら、19年2月米国で客死し、加藤さんは『9条入門』を最後の著書に、同5月に亡くなつた。戦後はいまだ終わっていない。



加藤 典洋氏



松尾 文夫氏

* 2007年から企画委員・会報委員長を経て 13年から15年まで企画委員長を務めた

たい。14年11月に登壇願つた時は『戦後入門』という分厚い新書を書き始めたところであり、同書が出版されて間もない15年12月にも同じシリーズ企画で再登壇願うことになった。日本の戦死者を哀悼できないままでは他国への謝罪もできないと訴えた加藤さんは左右から叩かれてきた。ただ、その戦後観には大いに共感していたので、時折一緒に痛飲した。

日本での戦死者を哀悼できないままでは他国への謝罪もできないと訴えた加藤さんは左右から叩かれてきた。ただ、その戦後観には大いに共感していたので、時折一緒に痛飲した。



“

中東激変、エネルギー情勢の転換期

14年間の司会の思い出

(日本経済新聞社客員編集委員) 脇 祐三

“

2005年から17年まで企画委員を務め、その後も19年春まで記者会見や研究会の司会を引き受けた。14年間、多数のゲストの話を聞いているうちに、世界経済も中東情勢も米国政治も大きく変わった。会見の記憶を連ねれば、世界の激変のメモワールになる。私が主に担当した中東の情勢の変化も劇的だった。

イラク戦争後の混乱、11年に広がった「アラブの春」、シリアの内戦とロシアの軍事介入、過激派組織「イスラム国」による領域支配、米英仏独中ロとイランの核合意とトランプ政権による米国の合意破棄……。中東をめぐる国際政治の変転に目を奪わながら、情報通信革命の影響も重要だ。

デジタル時代の視点提示した保坂氏

「アラブのSNS利用者数が、政府検閲下にある新聞の発行部数を超えた」「インターネットに慣れた中間層の若者が反政権集会に参加し、その集会に政権支持派はラクダで突つ込んだ」。11年2月、エジプトの

ムバラク政権崩壊直前に会見した保坂修司氏（現・日本エネルギー経済研究所・中東研究センター長）は、アナログ時代から続く独裁体制とデジタル時代の若者の行動を対比する新たな視点を提示した。

09年3月に会見した米国の宗教学者、レザー・アスラン氏の解説も斬新だった。「かつて若者は、最寄りのモスクの指導者にイスラム法の解釈や自分の行動の是非を尋ねた。今の若者はサイバー空間に流布する多様な言説の中から自分の感覚に合う解釈を選ぶ」「イスラムの受容が急速に個人化している」と同氏は指摘した。インターネットを通じて若年層に浸透するイスラムには、過激な行動につながる教条主義的な解釈も含まれる。

保坂氏やアスラン氏の指摘は長く記憶にとどまり、筆者の中東論の骨格の一部になつた。

中東に関する論考では、



上:池内恵さん(左)の会見で司会を務める脇氏(2014年6月27日) 下:脇氏が団長を務めた北欧取材団が視察した核廃棄物最終処分場「オンカロ」の入り口(2013年1月14日/フィンランド・オルキルオト島)

印象深い歴代IEA事務局長ら

原油の高騰と急落、米国の「シェール革命」、東日本大震災での原発事故、地球温暖化とパリ協定など、この十数年はエネルギー情勢の転換

池内恵氏（現・東京大学先端科学技術研究センターチーフ教授）の主張も印象深い。日本記者クラブに初めて登場した05年4月、池内氏は1960～70年代の党派的な世界観の延長線上にある日本の中東研究に言及し、「中東について語るように見えて、実は米国批判をしているだけだと喝破した。それ以来、回を重ねた池内氏と筆者のクラブでのやりとりが、日本のメディアの中東理解に貢献できただとすれば幸いだ。

歴代のIEA事務局長のうち田中伸男氏は、中国やインドとの連携が不可欠と強調し、米国の中東依存度が低下した後のシーケーレーン防衛の議論が必要と説いた。田中氏の後任のマリア・ファンデルフーフエン氏は、原子力の利用を否定すると二酸化炭素削減の壁が高くなると指摘し、原発は是非かという単純な二元論を戒めた。現事務局長のファティ・ビロル氏は、これから天然ガスと再生可能エネルギーの利用が拡大すると同時に石油の消費もなお増えると注意喚起した。

エネルギー問題では、13年冬の本記者クラブの北欧取材団でフィンランドの高レベル放射性廃棄物の最終処分場などを視察したことが、貴重な経験である。筆者はアジア取材団にも2回参加した。ベトナムの国営縫製工場では、日本企業が提供する布と型紙から衣服を作り、小売店ごとの値札まで付けて日本に出荷するのを見た。世界のビジネスの現状を理解するうえでも、日本記者クラブの記者会見や取材団は重要な役割を果たしている。

点でもあった。エネルギー問題も担当する筆者にとって、国際エネルギー機関（IEA）の歴代事務局長の会見は長く記憶に残る。

2013年に企画委員を拝命し、スキー・ジャンプの葛西紀明、プロテニスの錦織圭、フィギュアスケートの羽生結弦、日本ハムから米大リーグのエンゼルス（カリフォルニア）に移籍した大谷翔平、女子プロゴルフの渋野日向子ら選手の会見に携わってきた。それぞれ思い出深いが、最も印象に残っているのは18年5月22日の「日大アメフト部のタックル問題に関する会見」（写真）だ。



右手前は司会を務める宮内氏

関西学院大のクオーターバックにタックル、怪我を負わせた反則行為が社会問題化した事件。各社が連日報じる中、当事者である日大・アメフト選手の会見が急遽決まり、司会を仰せつかった。会見の1時間以上

前からテレビの生中継が始まり、350人超が集まつた会場は従来と異なる雰囲気に包まれた。
弁護士が同席する異例会見。20歳になつたばかりの学生が衆人環視の下、その重圧に耐えられるのか。彼が取り乱したら、司会者としてどう対応したらいいのか。不安を抱えて臨んだが、アメフト選手の冷静で誠実な受け答えもあり、混乱なく終了した。

が、ホッと胸をなで下ろしたのもつかの間。ポケットの携帯電話が鳴り放しになつた。テレビ中継を見た同業関係者、知人などから問い合わせが殺到。最も多かったのは仕事柄もあり王貞治、江夏豊、山本浩二、東尾修氏らのプロ野球関係者だった。中でも原辰徳氏は熱かつた。「絶対にアメフトを辞めてはダメ。必ずグラウンドに戻つてほしい。ボクのメッセージとして彼に伝えて!!」。変わつたところでは格闘技関係者からの「お誘い」。これには耳を疑つたが、そんなこんなの大反響。メールを含め着信履歴は300件を超えていた。

冷静で誠実だった日大アメフト選手 原監督からも熱いメッセージ

みやうち まさひで 宮内 正英（スポーツニッポン新聞社編集主幹）



「衆院選9党党首に聞く」で司会を務める川戸氏（左/1993年7月2日、3日）

いまだに“カラスの背広軍団”？

かわど けいこ 川戸 恵子（TBSテレビシニアコメンテーター）

郎新生党代表幹事の素早い働きかけ30年以上前だ。エライ方ばかりでビラの私には手の届かない場所という感じだが、どうしてもいろいろな方の会見を聞きたくて「キャスター」の肩書でどうにか潜り込んだのだ。せつせと通つて、91年に会報委員、ラブ主催の党首討論を開催するにあたつて、司会をNHKの前田一郎氏と一緒に務めることになつたのだ（司会や質問は企画委員が担当）。前年の参院選で初登場した日本新党に加え、自民から分裂した新生党やさきがけなど新党が次々登場、討論は2日に分けざるを得なかつたが、2日目の新党党首の気負いや質問者の迫力に、司会をしていても聞き入つてしまつた。そして選挙直後、小沢一郎新生党代表幹事の素早い働きかけで8党が連立、非自民の細川政権を作つたのを目の当たりにして、当時政治部に移つて政治改革を追いかけ思つたことをよく覚えている。

サッチャ英首相、ケネディ駐日米国大使、野田聖子総務大臣、小池百合子希望の党代表やゴルフの全英女子オーブンで優勝した渋野日向子さん、世界で活躍する女性のゲストがずいぶん増えた。しかし日本記者クラブの方は？ 40周年のパーティーにおいてになつた当時の皇后陛下に思わず「ご覧ください、このカラスのような背広軍団を！」と申し上げてしまつた。あれから10年、2019年の党首討論は女性がやつと質問者に登用された。しかしプレス会員約1980人のうち、増えたとはいえたが女性会員はまだわずか約130人！（19年11月時点）メディアは社会より遅れている、なんて言われないよう。そして、日本記者クラブも、加盟社も男性記者も女性記者も、もっともっと輝いてほしいものだ。



日本記者クラブにもっと来てもらえないものか」。経済担当の企画委員に事務局からこんなご下問があつたのは2016年の年明けだった。

緑の綾帳の前で会見するのは大半が閣僚や与野党の政治家、学者、官僚ら。経済人といえば財界3団体のお歴々か日銀総裁が1年に1回登場するかどうか。何とかならないかといふ思いはすつとあつた。

企画委員だつた日経の水野裕司論説委員らと決めたのが「企業規模の大小を問わず、会社や市場を変革しようと努力しているチエンジメイカーズ」を呼ぼう」という企画だつた。



日韓関係が冷え込んでいる。憂慮すべきところまでているが、なかなか事態改善の糸口は見えない。これよりはるか前、日本記者クラブが韓国取材団（団長・若宮啓文氏＝故人）を結成して、ソウルを私たちが訪れたのは、2006年2月のことだつた。このとき私は、ポスト盧武鉉を争う韓国政治家と直接、会見して意見を交わした。後に大統領の座に就く李明博、朴槿恵といった人物とも向き合うことになつた。氏らの関心は、ポスト小泉首相であり、日本次の指導者が、歴史問題をどう位置付け、(小泉首相が毎年行つた)靖国神社参拝をどうするか、にあつた。そして「日本が態度を改めなければ、事態はさらに深刻化するだろう」とのメッセージを発した。隣国でありながら、なかなか接することが難しいなかで、直に發せられる、後の

韓国取材団

重く刻まれた、後の大統領の言葉

かずや たかゆき
柏谷 賢之 (日本テレビ放送網取締役執行役員報道局解説委員長)



李明博氏（当時はソウル市長 前列右から2番目）とクラブ取材団
筆者は後列左6番目（2006年2月14日）

*クラブ理事 13年から15年まで施設運営委員長

リーダーの言葉は重く、深く刻まれた複雑な感情も、その表情から読み取ることができた貴重な機会だつた。政治記者の端くれとして、隣国の政治家へのアクセスは、日頃からもっと図られるべきだと実感した。

そして翌年、安倍政権が誕生する。私たちの訪問からは13年余りが経過し、いくつかの政権を経て、再登板の安倍政権は

史上空前の長期政権となつたが、文在寅政権の登場で、日韓関係はより溝を深めている。この間、未来志向という言葉が語られても、時を経ずしてまた振り出しに戻り、歴史問題に加えて、戦後秩序に関わる新たな要素も加わって、さらに問題は複雑化し、最悪ともいえる状況となつた。国会議員レベルの対話の模索もあるようだが、打開につながる兆候はない。ネット空間では、時に激しい言葉も飛び交う。しかしメディアに籍をおくものとして、過去を乗り越えるための努力を促すことはあって、さらには複雑化した。国会議員レベルの対話の模索もあるようだが、打開につながる兆候はない。ネット空間では、時に激しい言葉も飛び交う。しかしメディアに籍をおくものとして、過去を乗り越えるための努力を促すことはあって、さらには複雑化した。国会議員レベルの対話の模索もあるようだが、打開につながる兆候はない。ネット空間では、

私がいわば「押しかけ弟子」となつて示唆をいたいた先達がいる。一人は2005年に95歳で逝去し生涯現役の手本を示してくれた思索家ピーター・F・ドラッカーであり、もう一人は愚直なまでに「公僕」の信念を貫いたポール・A・ボルカーリー元米FRB（連邦準備制度理事会）議長である。ドラッカーの教えは事実を客観的に見るには「舞台からの客席からも距離をおいた『傍観者』になれ」

だつた。舞台に乗れば観客の受けを意識し、客席にいれば付和雷同するからだという。その彼が80歳で著した『新しい現実』はソ連崩壊を洞察した。

ボルカーリーは91歳を迎えた18年、回顧録を執筆、金融は経済・社会の公的資金が導入されることまである経済・社会のインフラであり、規律・節度が不可欠だとする一貫した主張を繰り返している。使命感（ミッション）と情熱（パッション）がにじみ出ている。うれしいことに同僚の村井浩紀さんが立派な翻訳をしてくれた（ボルカーリー回顧録「長期的な視点」も両氏が強調している。健全な金融、良き政府を求めて）。

短-termismなる言葉をよく耳にするようになった。日先主義、短期思考への反省の議論が生まれた。ジャーナリストにも長期的視点、確かな座標軸が欠かせない。

日本記者クラブ賞は年功賞ではない。時代潮流を的確にとらえ、しっかりと検証し、健全で力強い民主主義社会を確保するうえで不可欠な情報を提供するという使命に挑戦するジャーナリストを顕彰するものである。この賞がそうしたジャーナリストを輩出する触媒となることを祈念したい。賞の意義は一段と大きくなっている。

クラブ賞受賞から30年

民主主義揺らぐ中、高まる賞の意義

こじま 小島 明 (日本経済新聞出身)

*89年度日本記者クラブ賞受賞

金寄贈者であり推薦委員長も務めた



尾崎記念会館（現・憲政記念館）での日本記者クラブ創立総会（1969年10月31日）から50年になる。事務局で40年余り仕事をした人間だけに、感慨深い。ナショナル・プレクラブの育成、発展に尽力され、多くはすでに鬼籍に入られた懐かしい人々の相貌がまぶたに浮かぶ。まずはご指導いただいた、こうした方々にお伝えしよう。「日本記者クラブ、齡五十、ボクも後期高齢者になりました」と。

誕生から90年代までの歴史は、既刊の10年史、20年史、30年史にこと細かに記録されている。50周年に際して、これらをPDF化して、クラブのウェブサイトで読めるようになつた。いつでも思いついた時に簡単には、先人たちが何を考え、どういう条件下で、どう行動したかを知ることができます。特に事務局の新しいスタッフにはよく読んでもらいたい。幸いクラブ設立の準備段階から草創期のこと精通している春原昭彦氏も、フォード米大統領昼食会や昭和天皇・皇后会見、プレスセンターへのいえよう。

尾崎記念会館（現・憲政記念館）での日本記者クラブ創立総会（1969年10月31日）から50年になる。事務局で40年余り仕事をした人間だけに、感慨深い。ナショナル・プレクラブの育成、発展に尽力され、多くはすでに鬼籍に入られた懐かしい人々の相貌がまぶたに浮かぶ。まずはご指導いただいた、こうした方々にお伝えしよう。「日本記者クラブ、齡五十、ボクも後期高齢者になりました」と。

ふり返つてみれば、このクラブは新聞、テレビの隆盛と日本経済の拡張期を背景に、驚くべき高度成長をした。内外要人の会見を積み重ね、早い段階で社会的評価が確定するが、さらにそれを決定的にしたのが

90年2月2日の5党首公開討論会の開催だった。討論会の後、クラブは10階ホールの専用利用をめざした。対前年度予算規模で30%を超えた。対前年度予算規模で30%を超える会費改定を行い、株式会社日本プレスセンターの協力を得て、92年4月にそれを実現した。

会員の増加が続き、各社が大幅な負担増に応じてくれたおかげで、クラブ財政も健全なものになった。産声をあげてから20年余りのことだ。

この土台の上に、その後はあつたところ精通している春原昭彦氏も、

クラブ移転などで苦労した桂敬一氏も、個人会員で健在だ。お二人はクラブの生みの親である日本新聞協会から、事務局へ出向した経験を持つ。職員有志で話を聞くといい。

これから先の50年にはさらなる環境激変が待ちかまえているが、それを乗り切っていく際、執行部とそれを支える会員にとつても、先輩たちの足跡とその思いは、心の支えにもエネルギー源にもなることだろう。

邓小平副首相の会見（78年10月25日）の後、中国の要人が続々とクラブで会見した時期がある。そのころ、人民日報の社長さんがクラブを表敬訪問した。政府から一切の財政支援を受けずに、ほとんどを会員社である報道機関と会員個人の会費で運営していると説明すると、筆をとつてゲストブックに「記者の家」と書いてくれた。冷戦終結後、唯一の超大国になつた米国が経済のグローバル化を進める中で、中国だけでなく、ASEAN諸国も、インドも、アジア諸国は著しい経済発展をとげた。

15年ぶりに首相に返り咲いたマレーシアのマハティールさんが、原田亮介理事長が司会をした会見（2018年6月11日）で、前政権批判の文脈のなかではあるが、「フリー・プレス」という言葉を発したのだ。しかし、どうであろうか。これら

の国々の民主主義や報道の自由の現状は。これらの点での、日本の先行きを否定する人はいないだろう。中国は大国化したが、国際基準からみて妥当な「記者の家」を持つているだろうか。

もちろん、それぞれの国にはそれ

ルになれるかどうかは分からぬ。それでも明治以降、政治の民主化と報道の自由を模索してきた日本の姿と現状は、アジア諸国に何らかの参考になるのではないだろうか。いや、行動しなければならないのではないだろうか。そういう思考の枠組みの中でも、日本記者クラブという存在を考えるべきであろうと、私は思つている。

「記者の家」のこれから

元専務理事 岩崎 玄道

ぞれの事情もあるので、日本がモデ

ルになれるかどうかは分からぬ。それでも明治以降、政治の民主化と報道の自由を模索してきた日本の姿と現状は、アジア諸国に何らかの参考になるのではないだろうか。いや、行動しなければならないのではないだろうか。そういう思考の枠組みの中でも、日本記者クラブという存在を考えるべきであろうと、私は思つている。

2008年	2月 28日	オルメルト イスラエル首相	
	6月 9日	福田康夫 首相	☆
	9月 30日	「法の日」記者会見 島田仁郎 最高裁長官、大谷剛彦 最高裁判事務総長、樋渡利秋 檢事総長、宮崎誠 日弁連会長	☆
	12月 17日	ドナルド・キーン 文学者、評論家	*
2009年	3月 9日	益川敏英 ノーベル物理学賞受賞、京都産業大学教授	☆
	6月 25日	麻生太郎 首相	☆
	10月 2日	豊田章男 トヨタ自動車社長	☆
		ウェブサイトに会見動画公開開始	
	11月 4日	創立30周年(1999年11月1日)に統いて、創立40周年の記念パーティーでは天皇・皇后両陛下(現・上皇ご夫妻)をゲストに迎えた。	
			
2010年	5月 28日	金子兜太 俳人	☆
	7月 9日	山崎直子 宇宙飛行士	☆
	9月 1日	サバテロ スペイン首相	
	9月 27日	高行健 ノーベル文学賞受賞、作家	☆
	11月 1日	鈴木章 ノーベル化学賞受賞、北海道大学名誉教授	☆
	11月 25日	根岸英一 ノーベル化学賞受賞、米バデュー大学特別教授	

2011年～2019年

2011年	2月 8日	稻盛和夫 日本航空会長兼CEO	
	3月 18日	天野之弥 國際原子力機関 (IAEA) 事務局長	
	9月 6日	エマニュエル・トッド 歴史人口学者	☆
	9月 13日	サントス コロンビア大統領 (2016年ノーベル平和賞受賞)	
	10月 24日	ヴルフ ドイツ大統領	☆
2012年	5月 26日	サンデル ハーバード大学教授	☆
	7月 8日	潘基文 国連事務総長	☆
	7月 9日	カルザイ アフガニスタン大統領	
	10月 12日	サーリーフ ノーベル平和賞受賞、リベリア大統領	
2013年	1月 25日	白川方明 日本銀行総裁	☆
	4月 10日	ペニヤニエト メキシコ大統領	
	4月 19日	安倍晋三 首相 (第二次政権)	
	6月 4日	ズマ 南アフリカ大統領	
	6月 6日	三浦雄一郎 冒険家	☆
	10月 25日	三木谷浩史 楽天会長兼社長	
	11月 12日	小泉純一郎 元首相、「原発ゼロ」会見	☆
2014年	5月 28日	ハシナ バングラデシュ首相	
	5月 28日	五百旗頭真 前防衛大学校校長	☆
	11月 18日	錦織圭 プロテニス選手、全米オープン準優勝	
2015年	1月 31日	トマ・ピケティ『21世紀の資本』著者	☆
	2月 27日	黒田東彦 日本銀行総裁	

6月 5日	ベニグノ・アキノ フィリピン大統領	☆
9月 25日	トンプソン NYタイムズ社長兼CEO	☆
10月 30日	エディー・ジョーンズ ラクビー日本代表ヘッドコーチ	
12月 17日	キヤロライン・ケネディ 駐日アメリカ大使	
2016年	1月 7日	梶田隆章 ノーベル物理学賞受賞、東大宇宙線研究所長
	3月 2日	グランディ 国連難民高等弁務官
	3月 24日	黒柳徹子 ユニセフ親善大使
	5月 16日	井山裕太 囲碁七冠
	5月 25日	大村智 ノーベル生理学・医学賞受賞、北里大学特別栄誉教授
	11月 4日	アウンサンスー ミャンマー国家顧問兼外相
2017年	5月 9日	三世桐竹勘十郎 文楽人形遣い
	6月 23日	前川喜平 前文部科学事務次官
	8月 4日	中満泉 国連軍縮担当上級代表 (事務次長)
	9月 28日	小池百合子 東京都知事
	11月 11日	大谷翔平 プロ野球選手、大リーグ挑戦会見
	12月 13日	羽生善治 永世七冠
	12月 14日	グテレス 国連事務総長
	12月 15日	谷川俊太郎 詩人
2018年	2月 27日	羽生結弦 フィギュアスケート選手、平昌冬季五輪金メダリスト
	4月 27日	ハリルホジッチ 前サッカー日本代表監督
	5月 22日	日大アメフト部のタックル問題に関する会見
	11月 2日	安田純平 ジャーナリスト
2019年	1月 18日	王貞治 福岡ソフトバンクホークス会長
	5月 20日	金立群 アジainフラ投資銀行 (AIIB) 総裁
	6月 10日	アグネス・チョウ 香港民主運動家
	8月 6日	渋野日向子 プロゴルファー、全英女子オーブン優勝
	8月 29日	ジェイミー・ジョセフ ラクビー日本代表ヘッドコーチ
	10月 18日	芝野虎丸 囲碁、名人
	11月 11日	山中伸弥 ノーベル生理学・医学賞受賞、京都大学IPS細胞研究所長
	11月 15日	武藤敏郎 東京2020組織委員会事務総長
	11月 27日	山下泰裕 日本オリンピック委員会会長

＜衆議院、参議院選挙で党首討論会を開催＞

1990年2月2日、第39回衆院選の公示日前日、自民、社会、公明、共産、民社の5党党首による公開討論会を開催。これ以降、国政選挙でクラブ主催の討論会が定例化している。



参院選7党党首討論会（2019年7月3日）

**1970年～80年**

1970年	1月 13日	フォール 元フランス首相	
	4月 10日	佐藤栄作 首相	*
1972年	6月 12日	キッシンジャー アメリカ大統領補佐官	*
	10月 6日	田中角栄 首相	*
1973年	5月 11日	リー・クアンユー シンガポール首相	*
1974年	11月 20日	フォード アメリカ大統領	*☆
1975年	1月 16日	三木武夫 首相	*
	4月 8日	チャウシェスク ルーマニア大統領	*
	10月 31日	昭和天皇・皇后両陛下	☆
1976年	5月 28日	司馬遼太郎 作家	*☆
1977年	1月 27日	福田赳氏 首相	*☆
	4月 27日	マルコス フィリピン大統領	*
	12月 7日	土光敏夫 経済団体連合会会長	*
1978年	9月 12日	植村直己 冒険家	*
	10月 25日	鄧小平 中国副首相	*☆
1979年	1月 22日	大平正芳 首相	*
	8月 27日	市川房枝 参議院議員	*☆
	10月 12日	ブーブメリ 仏「ル・モンド」紙創設者	☆
1980年	4月 14日	カール16世グスタフ スウェーデン国王夫妻	
	8月 18日	鈴木善幸 首相	*

1981年～90年

1981年	4月 23日	マルグレーテ2世 デンマーク女王	
	5月 15日	ワレサ ポーランド「連帯」議長	☆
	5月 21日	クロンカイト 米ニュースキャスター	*☆
	5月 28日	ホーネッカー 東ドイツ国家評議会議長	*
	10月 14日	アラファト PLO議長	*
1982年	4月 16日	ミッテラン フランス大統領	
	6月 2日	趙紫陽 中国首相	*☆
	9月 21日	サッチャー イギリス首相	*
1983年	1月 13日	中曾根康弘 首相	*
	1月 25日	マハティール マレーシア首相	*
	4月 7日	ムバラク エジプト大統領	*
	4月 21日	趙治勲 囲碁棋士	
	5月 25日	森英恵 デザイナー	
	11月 26日	胡耀邦 中国共産党総書記	*☆
1984年	6月 2日	シアヌーク 民主カンボジア大統領	*
	7月 17日	森繁久彌 俳優	*☆
1985年	5月 9日	吉永小百合 女優	☆
	11月 30日	ガンジー インド首相	☆
1986年	11月 13日	コラソン・アキノ フィリピン大統領	*☆
1988年	12月 21日	シェワルナゼ ソ連外相	*
1989年	4月 14日	李鵬 中国首相	*
	10月 26日	サハロフ 博士、ソ連人民代議員	☆
	12月 8日	海部俊樹 首相	*
1990年	1月 16日	エリツイン ソ連最高会議代議員	☆
	5月 26日	盧泰愚 韓国大統領	*☆

1991年～2000年

1991年	4月 19日	ゴルバチョフ ソ連大統領	*☆
-------	--------	--------------	----

1992年	4月 25日	緒方貞子 国連難民高等弁務官	*
	3月 18日	フジモリ ベル大統領	*
	4月 8日	江沢民 中国共産党総書記	
	7月 14日	宮沢喜一 首相	*
	10月 23日	ワイダ ポーランド映画監督	*
1993年	2月 18日	ガリ 国連事務総長	*
	2月 22日	曙 横綱	
	2月 27日	コール ドイツ首相	*
1994年	5月 31日	羽田孜 首相	*
	11月 4日	イチロー プロ野球選手	*
	12月 14日	ラビン イスラエル首相	☆
1995年	4月 12日	金大中 韓国前民主党共同代表	*
	7月 5日	マンデラ 南アフリカ大統領	*
	10月 27日	野茂英雄 米大リーグ・ドジャース投手	
1996年	4月 2日	錢其琛 中国副首相兼外相	*☆
	9月 11日	橋本龍太郎 首相	*
1997年	4月 8日	ヘルツォーク ドイツ大統領	*☆
	8月 25日	ネタニヤフ イスラエル首相	
	11月 28日	岡田武史 サッカー日本代表監督	
1998年	1月 13日	ブレア イギリス首相	*
	4月 29日	シラク フランス大統領	*
	11月 28日	江沢民 中国国家主席	*
1999年	2月 26日	フン・セン カンボジア首相	*
2000年	1月 19日	村山富市 元首相	*
	10月 5日	トルシエ サッカー日本代表監督	
	10月 16日	朱鎔基 中国首相	*

2001年～2010年

2001年	5月 22日	柳井正 ファーストリティリング社長	
	5月 23日	白川英樹 ノーベル化学賞受賞、筑波大学名誉教授	
	10月 3日	ムベキ 南アフリカ大統領	
2002年	1月 18日	小泉純一郎 首相	*
	3月 13日	ムシャラフ パキスタン大統領	
	4月 26日	プロディ EU委員長	*
	12月 3日	ゴーン 日産社長	*
2003年	6月 23日	メガワティ インドネシア大統領	
	8月 28日	石原慎太郎 東京都知事	
2004年	2月 24日	アナン 国連事務総長	
	3月 16日	ロウハニ イラン最高安全保障委員会事務局長	
	4月 13日	エルドアントルコ首相	
	10月 18日	王毅 駐日中国大使	☆
2005年	6月 3日	ユドヨノ インドネシア大統領	☆
	7月 22日	ユーシェンコ ウクライナ大統領	
2006年	3月 9日	朴槿恵 韓国ハンナラ党代表	☆
	6月 12日	白鵬 大関	
	6月 23日	町田顕 最高裁長官	*
	10月 19日	ロゲ IOC会長	
2007年	1月 16日	安倍晋三 首相（第一次政権）	
	3月 13日	ペレス イスラエル副首相	*
	4月 16日	中西進 奈良県立万葉文化館館長	
	5月 24日	塙野七生 作家	☆

あとがき

会報委員会 委員長 乾 正人

(産経新聞社執行役員 論説・正論担当 論説委員長)

巡り合わせというのは、面白い（恐ろしい？）もので、巻頭言を書いている原田亮介理事長は、母校の先輩である。そもそもそんじよそこらの先輩ではなく、草創期から日本記者クラブに関わってきた故・青木彰氏（注）が大学教授時代に学生から乞われて始めた「青木塾」の先輩でもあり、いまだに頭が上がらない。歌舞伎のお富さんじやないが、何事も前世の因縁である。

それはさておき、この記念特集は、半世紀にわたる日本記者クラブの歩みを支えてきた諸先輩の貴重な証言が、びつしりと詰まっている。デジタル革命に翻弄され、メディアの激動期に立ち会っている現役の諸兄諸姉には、特にじっくりと読んでいただきたい。

言論の自由を守り、当クラブが次の50年後も「記者の家」であり続けるために我々は、いま何をなすべきなのか。それを考へる手がかりになれば、望外の幸せである。「何を偉そうに。君たちがもっとしつかりやれ！」という青木先生の叱声が聞こえてきそうだが。末筆ながら筆者の皆さんをはじめ、50年特集づくりにご尽力いただいたすべての方々に心から感謝申し上げる。

（注）あおき・あきら（1926～2003年）。1949年、産経新聞社入社。編集局長として新聞協会賞に輝いた連続企業爆破犯人逮捕スクープを指揮した。産経退社後、筑波大学教授に転じ、マスコミ志望者に自宅を開放して「青木塾」と呼ばれる私的ゼミを12年間にわたって続けた。晩年はメディア界の諸問題を現役記者とOBが語り合う場が必要だと呼びかけ、中江利忠氏らと創設した「土曜サロン」は、今も続いている。妻は女優の故・佐々木すみ江氏。



日本記者クラブ会報 No.598 (2019.12.10) 別刷 <50年特集>

発 行 ● 公益社団法人 日本記者クラブ

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル
電話: 03-3503-2722 FAX: 03-3503-7271 URL: <https://www.jnpc.or.jp/>

会報委員会 ● 委員長: 乾 正人 (産経新聞社)

委 員: 塚田 健太 (毎日新聞社) 曽我部 桂 (共同通信社) 桑田 広久 (福島民友新聞社)

竹内 竜一 (高知新聞社) 中村 直樹 (テレビ朝日) 神田 俊英 (日本新聞協会)

渡辺 昌己 (日本民間放送連盟) 追田 朋子 (個人D会員)

西井 泰之 (個人D会員)

事務局: 本庄 五月・杉本 翔一

©Japan National Press Club 2019, Printed in Japan

本書に掲載されている写真・文章等の無断転載はお断りします。

